

忌避される日本の戦争責任

—— 平和構築を阻む歪な歴史観を越えるために ——

額 額 厚

歴史に向き合う原点として

二〇年ほど前のことである。一九八六年の八月から九月にかけて、私は中国の首都北京を皮切りに武漢、南京、上海などの各都市を回ったが、最大の目的は同年に開館した南京大虐殺記念館（正式名称は、「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」）を訪れることだった。同時に市内一三カ所に建立された虐殺のメモリアム（記念碑）を見て歩き、そこに記された記録を直に読み取る作業を進めたかったのである。

それぞれ個性ある様式を整えたメモリアムには虐殺された中国人の数などが克明に刻まれていた。この作業のなかで私の脳裏にいまでも深く刻まれた出来事がある。それは揚子江沿いに位置する下関（シキカキ）という船着き場付近に建立されたメモリアムに対面した時のことだった。

私は、メモリアムをカメラに収めるため焦点を絞り込んだとき、そこに殴り書きされた落書きを見つけたのである。落書きを判読できなかつた私は付き添ってくれていた中国外務部（日本の外務省に相当）の方に尋ねてみた。すると、彼は困惑気味の表情を顔に浮かべ、手を横に振りながら「不用了吧」（ブヨシラバ）（必要ないと思います）と丁寧に断つたのである。そうなると余計にその意味を知りたくなるものだ。

それで別の若い通訳の方に尋ねると、「こんな立派なメモリアムが建立されたとしても、日本軍に殺された私の夫は返ってこない」という意味だと言う。日本軍による虐殺の記憶をメモリアムに託して残すことは、遺族であろう落書きの書き手をして感情的には耐えられない行為、と受け止められたのかも知れない。そのことを外務部の方も想像しての私への対応だったのである。

歴史事実を文献や資料として後世に残すことと異なつて、歴史事実が常に目に触れる場に、高さが三メートル近いコンクリート製のメモリアムは、時として悲しみを一層よみがえらせてしまうのかと、私自身、複雑な思いに囚われたことを想い出す。恐らくメモリアム建立の意義を認めながらも、思わず噴き出した悲しみの感情が落書きに向かわせてしまったであろう。その女性の思いが、歴史叙述に向かう折に決まって私の脳裏に浮かぶ。この体験は、私が日中関係史を論ずる場合の原点となっている。

日本と中国の悠久の歩みのなかで、両国が「戦争」で繋がっていた時期は確かに短いかも知れない。だが、その一時に、落書きで悲しみの感情を示すしかなかった数多の遺族を生み出した日中戦争の歴史は、現在を生きる私たち日本人にとつても、心の奥底にまで突き刺さった棘とげなのである。日中戦争は、それまでの日中関係を断絶するに充分であった。勿論、一九七二年九月二九日の国交正常化は、政治や経済の領域で両国にとって大きな恵みをもたらしたことは間違いない。

最近まで盛んに言われた「政冷経熱」という日中間に横たわっていた、ある種重たい雰囲気から脱しつつある感さえある。だが、この間にも突き刺さった棘は、放置

されたままだった。戦後の日本人にとって、あまりにも長い間放置されてきたがゆえに、その痛みの感覚が薄らぎ、突き刺さっている現実にも無自覚となりつつある。

私が日中関係史を学ぶようになって久しい。そこでは数多の文献や資料を頼りにする。しかし、それだけではない。日中関係史のなかで翻弄ほんごうされ犠牲を強いられた人々、取り分け日中戦争に巻き込まれ、傷つき命まで奪われたしまった人々への思いを大切にしたいと思ひ続けた。

そう思うに至ったのは、今から思えば南京・下関の現場体験であったかも知れない。歴史を体験や感情という要素を取り込んで叙述する難しさと危うさを意識しながらも、私はそのような歴史叙述の必要性を痛感している。言い換えれば、歴史は人間の感情によつて記録され、そして、記憶されもする。だとすれば、歴史に翻弄ほんごうされ続ける人間の感情に向き合わないと、歴史に向き合ったことにはならないのではないか。

蘆溝橋のほとり

二〇〇八年一〇月、私は北京大学歴史系で講義するため北京を訪れていた。北京は、二〇〇八年八月に開催したオリンピックの余韻をまだ幾分か残していた。講義の

合間に、私は久しぶりに永定河にかかる石橋である蘆溝橋（マルコポーロブリッジ）に出かけてみた。

七〇年ほど前、この橋を挟んで中国軍と日本軍との間に軍事衝突が起きた。一九三七（昭和一二）年七月七日のことである。この歴史事実を日本では蘆溝橋事件、中国では七・七事変と呼ぶ。五年ほど前に私が訪れた時、永定河は水の流れを失い、草が繁茂し、その草むらに何隻かの遊覧用ボートが放置されていたことを思い出す。しかし、オリンピックを控えて堰が造られたため、永定河は豊かな水量の水を保っていた。

蘆溝橋事件は、一九三七（昭和一二）年七月七日の夜に起きた。北平（現在の北京）西南部外豊台に駐屯する支那駐屯軍歩兵第一連隊第三大隊の第八中隊が永定河付近で演習中に、「中国軍陣地のある方向から実弾が撃ち込まれた」ことから端を発した。だが、事の真相は定かでない。

誰が何の目的で実弾を放ったのか、現在まで依然として諸説がある。はっきりしているのは、この言うならば謎の実弾飛来を理由にして、日本軍が中国軍に攻撃をしかけたことだ。そして、事件処理をめぐる日中両軍の駆け引きと、さらには日本の軍中枢における事件処理をめぐる対立が浮き彫りにされたことである。

さらにもっと大きな問題がある。謎の銃弾飛来から、結局は日中全面戦争へと発展していったことである。ここでの論点は二つある。一つには、銃弾の飛来による損害がなかったにも拘わらず、なぜ日本軍は中国軍に攻撃をしかけたのか。そして、二つには中国の首都近郊に、なぜ日本軍が駐屯し、中国陣地に攻撃をしかける機会を狙っていたのか、という素朴かつ重大な問題である。

この問題に関して、戦後日本の近代史研究者は真剣に向き合ってきた。歴史研究者だけでなく、多くの日本人にとっても、関心を寄せてきた問題でもある。中国でも歴史の捉え方など、日本との違いはあるものの、同じであろう。しかし、現代の日本において、そうした問題への関心は薄らぎ始めていることも確かであろう。実は「愛国教育」の一環として、特に歴史教育に力を注いだきた革命以後の中国でさえ、これまた同様であろう。

特に日中両国の青年層においては著しいのではない。か。ましてや蘆溝橋から遠い距離にある日本においては。そんな思いを抱きながら、私は何度もこの石橋を往復していた。日中全面戦争の開始を告げることになった蘆溝橋での両軍の衝突は、それよりも大分前から日本側によって準備されたものと言える。近代日本は、欧米諸列強との競争のなかで、隣国中国の資源と市場の争奪戦

に参入していき、そのために強力な軍隊を保有し、軍事官僚が勢いを増し、軍事機構が膨らんでいった。

蘆溝橋事件で、日本軍が中国軍に攻撃を仕掛けたのも、それより先に日本軍が中国の首都近郊に駐屯していたのも、近代日本という国家に刻み込まれた侵略思想や侵略主義があったからであろう。遡れば一九〇〇年に起きた義和団事件を機会に駐兵権を得た日本は、敢えて言うならば、この時から中国制圧の機会を窺っていた。

蘆溝橋事件から日本の敗戦に至るまで、当時の日本の軍部指導者や数多の日本人は、一体中国や中国人をどのような目で見ていたのであろうか。一体、広大な土地と巨大な人口を有する中国を、どうしようとしていたのか。中国との関わりのなかで、日本はどう変容を迫られたのだろうか。発展と失敗の歴史として日本現代史を追ってみた場合、日中戦争は丁度その転換点に位置している。

「反日運動」と「愛国教育」

二〇〇五年三月から四月にかけて中国各地で、いわゆる「反日運動」があいつぎ発生した。ことの始まりは、三月末に広東省の省都である広州市で学生たちだが、日本の国連常任理事国入り反対の署名活動からであった。今回の「反日運動」をいま振り返ると、戦前期の五・

四運動（一九一九年）や五・三〇事件（一九二五年）を想起してしまう。前者は、一九一五年一月一八日、日本政府（大隈重信内閣当時）が中国政府に突きつけた「対華二一カ条約」の解消を訴え、日本が取得していた山東権益の返還が、第一次大戦後のベルサイユ平和条約締結の際にも実現しなかったことを機会に、北京の学生たちが激しい反日運動に立ち上がった事件である。後者は、上海の日本紡績工場の差別的な労務管理に反対する大衆的な反日運動である。

一連の運動の起点は、日本が中国への強硬姿勢を露わにしつつあった明治年間から幾度も起きていた。この二つの「反日運動」は、労働者や学生が運動の主役として登場し、中国政府の対日政策に大きな影響を与えた点で画期的な事件とされる。

二つの「反日運動」以後、中国民衆の対日感情は悪化の一途を辿った。「反日」から「排日」、さらに日中全面戦争開始以後は「抗日」とエスカレートしていく。日中全面戦争開始以後、「抗日」の名の下に中国民衆は、日本軍を敗北に追い込んでいったのである。二〇〇五年の「反日運動」と戦前期のそれとの単純な比較は慎むべきかも知れない。だが、戦前期に培われた中国人の日本に向けて発せられる、言わば歴史の感情は、ある種のメツ

セージを持った政治行動として噴出してゐる。

ところが中国人が抱く歴史の感情への配慮は、現在の日本政府及び日本人に余り見受けられない。例えば、今回の事件の原因に、中国の昨今の驚異的な経済発展に伴う格差拡大に不満や不平を頂く人々が、捌け口として「反日」に駆り立てられた、とする説が盛んに論じられた。中国国内における諸矛盾を棚上げするため、中国政府が目論んだ「官製デモ」だと言うのである。

このことを全面的に否定できるものではない。だが、そうした側面だけからは、事態の真相は見えてこない感じもする。加えて、日本のメディアや知識人や言論人と言われる人たちの多くが口にした原因論がある。中国の「反日暴動」は、中国が文化大革命以後に進めてきた、いわゆる「愛国教育」の結果だとする批判だ。

「愛国教育」は、中国政府によって指導された中国人の国家意識を喚起することを狙いとした一大政策である。かつての抗日戦線勝利などの歴史事実を学ぶことで、中国人のあらたな国家意識を呼び起こす工夫がなされている。要は、中国国民としての一体感を生み出すための歴史認識が繰り返し説かれてきたのである。確かに、中国では日本と同様に国定教科書（日本では検定教科書というが実質は国定教科書である）を用いる。教師用

の指導書には、「抗日戦の英雄たちの愛国精神を学ばせる」とし、「愛国教育」の目的を明らかにしている。そのことをもって「愛国教育」と「反日教育」とを結びつけるのは、少々無理があるように思われる。

ならば、「反日運動」が発生した背景は、一体何だったのだろうか。私は、この「反日運動」あるいは「反日デモ」を、ことさら中国の国内問題として片づけてしまふのは、事態の真相を十分に把握したことにならないのではないか、と思つてゐる。デモの参加者たちは都市在住の群衆（「中間層モブ」）であり、さらには農村から都市に流入した出稼ぎ労働者や、中国では「待業青年」と称される失業青年たちであった、とする分析がある（高原基彰「不安型ナシヨナリズムの時代」洋泉社、二〇〇六年）。この点だけを取り上げれば、国内問題だと片付けてしまふのは容易い。

だが、今回見られた中国青年層の怒りの矛先が日本に向けられた事実の背景を考へておくべきではないだろうか。中国では、都市部青年層において、すでに韓国と並ぶネット社会が形成されている。中国の官製メディアによる一方的な情報受信だけでは飽き足りない青年層が、ネット上で多様な話題を果敢に飛び交わせている。

生活経済の環境がドラスチックに様変わりするなか

で、自分自身と周りの者たちが、豊かになっていき、中国人としてのプライドや国家意識が何も国家による教育を介さなくとも高まっていくのは、自然の成り行きであろう。大国意識を抱き始めた青年学生層の拡がり、同時に数多の矛盾や限界に苦しむ青年層が、電子媒体によって、ある種の連携を創り出す環境のなかにはいるのでは、と思われてならない。

そうした環境変化のなかで、彼ら彼女らにとっては、中国が発展していくなかで浮き彫りになってきた経済格差の一因に、隣国の日本が深く関わっているのではないかとする思いがあるようだ。つまり、日本や欧米諸国との経済関係の深まりが、中国の経済発展の要因であると同時に、一方では国内における経済格差の拡がりを招く要因ともなっているのでは、とする見方である。とりわけ経済関係の進展が著しい日本への距離の取り方について、中国の青年層は難しい局面に出会っている。複雑な問題だが、曖昧な態度は採ることはできない、とするのが中国青年層の共通の対日認識となっているのではないか。

そこでは最大の懸案とも言うべき歴史問題が、経済や政治の判断を優先するあまり、一貫して棚上げにされてきた。日本も中国も、それぞれの国内事情から歴史問題への関心あるいは追求は、手控えられてきた。歴史問題

の扉を果敢に押し広げた中国の青年たちは、かつての日本の侵略の歴史を踏まえつつ、日本に歴史の清算を迫ることによって、被害意識から解放されることを求めているのではないだろうか。ある程度の豊かさを手にし始めた中国人たちの多くが、これまで何にも増して優先してきた日本や欧米との経済関係の見直しを始めている。

そうした動きのなかで、歴史問題への関心が浮上しているのではないか。謝罪の言葉を繰り返す一方で、依然として歴史に正面から向き合おうとしない日本政府及び日本人への不満が蓄積されてきたことも確かであろう。つまり、中国との戦争の評価を明らかにしようとする日本政府や日本人に対する中国青年たちの深い苛立ちが、今回のような「反日デモ」の形で表に現れてくるのではないか、ということである。

中国の青年層が時として日本人を指して口にする「小日本」の言葉には、決してかつてのような侮蔑の感情が込められているとは思わない。だが、彼ら彼女らが歴史の問題と合わせて「小日本」と言い放つ時、そこにはやはり苛立ちや怒りの感情の一端が含まれているのではないか、と思うのは私だけだろうか。

中国の大学生たちとの交流

時間軸が前後するが、私は二〇〇七年三月三〇日、講演のため中国の西安にある西安交通大学外語学院（日本の大学の外国語学部に相当）を訪れた。私は当初、日中戦争の研究成果をも含めて話す予定にしていた。けれども、大学側から、できれば過去の両国間の戦争という不幸な関係史には触れず、これからの両国関係の展望について語って欲しい、という要請を受けることになった。

その意図は明らかである。対日不信感を抱いている学生を、私が過去の戦争に触れることで刺激しないで欲しい、ということである。中国政府の方針でもあるが、日本政府との間に存在する懸案としての歴史問題で、中国の学生たちを刺激することは避けたいとする配慮からである。それはそれで、慎重な姿勢の反映でもある。

だが、その姿勢が中国青年の歴史認識を大変に皮相なものにもしている、一要因にも思われる。歴史を感情の対象とする余り、歴史から共に教訓を引き出し合い、二度と不幸な歴史を重ねないための英知を絞る、という発想や創造性が、それでは生まれてこないのである。そこでは中国が被害国あるいは被害者であるから、一方的に日本を糾弾することが中国青年にとつての歴史問題であ

って良いわけがない。それは、ある種政治判断に属するものである。もちろん、このことを強調することによって、日本及び日本人の加害の立場を薄め、相対化しようとするものではない。

私は、そうした点にも言葉を選びながら触れておいたが、メインテーマは、大学側の要請にも従う形で、二一世紀における東北アジア地域における「平和共同体」構築の可能性と必要性についてとした。あれこれの資料や欧州連合（European Union, EUと略す）の事例を持ち出しながら話を進め、講演を終了した。

その席上での質問を紹介しておく。日中関係の東アジア全体を含めた日中関係の未来像を語った件への意味深い質問だった。質問者は流暢な日本語を話す若い教員である。彼曰く、「将来、中国や日本、韓国などが中心となってアジア版のEUを構築するのは賛成です。しかし、問題が二つあると思います。一つは、歴史を清算しないままで、日本はこの構想を担える国家として信頼を得られると思いますか。二つには、それが構築されたとして、どの国が中心となるべきだとお考えですか」と。

質問自体は、決して目新しいものではない。韓国や台湾でも同じ質問を受けることもしばしばである。同年九月にも中国を再訪し、済南市の山東大学と大連市の遼寧

師範大学で講演した折にも、ほぼ同様の質問を受けた。この種の内容に、いま中国の若い教員や学生は、強い関心を抱いているようだ。

質問者は、アジア平和共同体の構築による不戦地帯の構築という私のメッセージを十分に理解しつつ、日本の資格を問うたのである。同時にここには戦争責任の無時効性と国際性という、厄介な問題提起も含まれている。

戦争責任を痛覚し、相応の具体的政策の展開のなかで、過去の克服への真摯な取り組みを暗に求めているのである。同時に戦争という政治現象が持つ国際社会における教訓を活かそうとする姿勢が、恒久的に求められる性質についても言及せざる得ない質問内容だった。質問者が、そこまで念頭に置いて質問したのかは定かではない。この種の質問への解答には、そのことを踏まえて応答すべきだと思ってきた私は、次のように語った。

歴史とは、過去と現在を繋ぐ橋のようなものです。その橋は、過去と現在という橋桁が必ずどんな場合でも同じ高さで創られるように、片方が高く、片方が低くしてはいけません。歴史という橋を自由に行き交うためには、過去と現在という二つの橋桁は同じ高さで創らなければ。その意味で、確かに日本は過去という

橋桁を随分と低く創ってしまったようなものです。

私たち日本人は、本来の歴史を取り戻すためにも、思い切って二つの橋桁を作り直さなければなりません。その工事はいつ完了するかも知れませんが、絶えず橋桁を併行に保つ不断の努力が、戦争責任の無時効性という課題に応えることだと思います。また、そのことを国際社会で広く評価され認知されること、それが国際社会のなかで信頼を勝ち得る方途であること、それが戦争責任の国際性ということで理解しておきたいと思います。

さて、もう一つの問題です。どの国が中心となるかですが、発想の転換が必要に思います。確かにEUは事実上、かつての敗戦国であったドイツが、その経済力ゆえに、また、過去の克服への努力が評価される格好で中心国となっています。でも私は、どの国が中心国となるかの議論は生産的だと思いません。

例え平和共同体が構築されたとしても、それが一国だけで代表され尽くせない内実を創り上げることが大切だと思いたい。経済力や軍事力に差異があったとしても、参加国の全てが対等である訳ですから、本当の意味での国際民主主義を実現する場としても、平和共同体を位置づけたいらうでしょう。つまり、指導国

はあなた方中国であり、我々日本であり、全ての参加国である。その位置づけを遅くしていけば、二度と不幸な歴史を刻むことはないのではないか、と思うのです。

このやり取りを聞いていた他の出席者が次々に新たな質問を含め、一層白熱した討論会の場と化した。中国の青年たちは、真剣に日中関係の過去も現在も知りたいという気持ちで一杯だった。そうした雰囲気の中で、私はいまなお日中両国の人々が、封印状態こそ形式上解かれたとしても、本音で闊達に議論する、情報交換するというレベルには達していない、ことを痛感することになった。自由闊達で生産的な議論の応酬が成立してこなかったことは、両国それぞれの事情があったことは言うまでもない。

確認しておきたいこと、日本と中国との間に、取り分け両国の民間レベルでの自由な議論の蓄積が国交回復後、三五年という年月の経過にも拘わらず、あまりにも不十分ではなかったか、ということである。両国間には夥しい量の物流があり、沢山の観光客が訪中し、日本人の中国留学生が二万人以上、中国からの日本留学生が九万人以上となるなど、膨大な量の物流だけでなく、夥しい人流が行き交う両国であるのに、日本に滞在する外国

人の総数は、二〇〇七年末段階で二一五万二九七三人となり、そのうち最も多いのが中国籍の六〇万六八八九人で、韓国・朝鮮籍の五九万三四八九人を上回ったとしている（『朝日新聞』二〇〇八年六月四日付朝刊）。

その不十分さの原因は、何であろうか。私が考えるには、両国の人々の自由な議論を妨げているのは、やはり歴史問題が大きいのではないかと、いうことだ。それを課題として受け止め、歴史という過去と現在を繋げる橋が、同時に中国と日本の過去と現在を繋げる橋として見直す訳にはいかないだろうか。

本特集に絡めて言えば、日本が日中一五年戦争に代表されるアジア侵略戦争と正面から向き合い、負の歴史事実から平和構築のための教訓を引き出そうとしない限り、日本がアジアから信頼を勝ち得、平和構築のための陣形を築きあげることが極めて困難ではないか、ということである。

（こうけつ あつし／山口大学人文学部教授）

追記 以上の問題意識から縦横は、『私たちの戦争責任 昭和初期の二〇年と平成期二〇年の歴史的考察』（凱風社、二〇〇九年四月刊）と、『日本は支那を見くびりたり』日中戦争とは何だったか』（同時代社、二〇〇九年七月刊行）を出版した。合わせて御一読願いたい。